

傷寒・金匱方劑解説 05 いー4

音順	方劑名	生薬構成 および製法・服用方法
	傷寒論・金匱要略条文	読み および解説・その他
いー4	茵陳五苓散	茵陳蒿末（苦平）10g・五苓散5g 上2味をよくかき混ぜて、食前に2gずつを1日3回服用する。
	黄疸病脈証併治第十五第20条（金匱要略）	
	「黄疸病、茵陳五苓散之を ^{つかさど} 主る。」	
	解説 黄疸病で、五苓散の証のあるもの、即ち脈浮、汗が出て、小便不利のあるものは、茵陳五苓散が主治する。	
	茵陳五苓散は、茵陳で脾胃に鬱する湿熱を捌き、五苓散で発表利尿する。	
	黄疸は、湿より起こる場合もあり、湿熱が強く、無汗で、小便不利があり発黄した場合には麻黄連軹赤小豆湯・茵陳五苓散などを用いる。	
	「方劑決定のコツ」の注釈	
	この条文には、本方を用いる証が何も記されていないので、薬方から考えねばならない。	
	茵陳蒿は苦平で、その働きは皮膚中に鬱熱があるために熱が閉ざされて発散することが出来ずに黄を発するのであるが、それに伴って五苓散の証である渴と小便不利があるはずである。内熱より来る黄疸は、小便不利が重要な証の一つであるが、本方の場合には裏の熱実は無く、胃の虚熱が関与する。その胃の虚熱のために体内の水分を散ずることが出来ず、更に皮膚の熱のこもりを生じて黄を発したものが、その目標であると言える。	
	茵陳五苓散証	
	新古方薬囊によれば「黄疸にて咽の渴きが甚しく、小便の出が悪い者、大便は必ずしも秘結せず。或は水を呑み過ぎて吐く者もあり。頭だけでなく身にも少し汗が出る者もあり。本方の証と茵陳蒿湯の証と似た所あれ共、茵陳蒿湯証は熱が内にこもりて重き感じがあり、茵陳五苓散証は熱が外に在って軽い感じがあるなり。」と記されている。	